

「江戸時代の家相説」(文部省科学研究費出版助成による)刊行の報告

短期大学部家政科 村田 あが

書名：『江戸時代の家相説』

発行：1999年2月5日

出版社：雄山閣出版株式会社

平成十年度文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」(一般学術図書)の交付を受けて刊行した。

本書は、1997年に東京大学に提出した学位請求論文「家相文献を中心とする江戸時代の家相説の展開の研究」を加筆訂正し、新たに江戸時代の2文献の現代語訳を附したものである。江戸時代後期の家相説の傾向を明らかにし、その展開と流布の一端を解明している。

家相説は、江戸時代後期に都市を中心に流行したが、それは主に住まいの様々な事象について方位別の吉凶判断を下すことにより、住み手の禍福を左右するというものである。当時の家相文献を詳しく読むと、占い書としての側面だけではなく、住まいの敷地選定から間取り、庭造りにいたるまでの様々な知識が盛り込まれており、江戸時代の住まいに関する資料としての価値が高いことがわかる。

江戸時代の家相説は、7世紀に導入された陰陽五行説をふまえ、平安後期以降の庭造りや鬼門説の内容を取り入れ、方忌み、方違えを習合した住まいの空間における禁忌の概念をベースにし、具体的には江戸時代に中国から舶載された漢籍の構成を基に、畳を敷き詰めた部屋の間取りに関する事項など日本独自のものを加える過程を経て複雑化したものである。

本書では、家相文献の概要と構成、家相流派の存在、家相説の流布と民間信仰との関連性、家相文献の背景などを明らかにし、特に江戸時代後期に中国から舶載された陽宅風水の書との内容比較を通して、これら漢籍の輸入と国内での家相説の流行の関係について考察を行った。